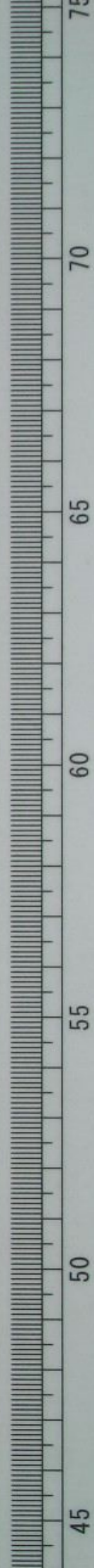




世新文鑑

四

利
99
止



利門  
99  
卷5



本朝文體第八



贊類

淨土和讚 奉覺寺町誌見 室山前誌見

古玉門後誌見

我松讚 古魚帝贊 負讚 負讚 讚

紋柱自讚 讚徒然讚

銘類

花桶銘 摺木銘 著花銘 旅觀銘

古硯銘 不出銘

大明之盛



琴貝類

淨土和讃

親善聖人

彌陀ノ名号唱へて信ふニト得ル人ハ憶念ノ心常ニシテ  
 仰恩報スル思イアリ折言頼不思誤ヲ疑ヒテ御名  
 ヲ稱スル往生ハ宮殿ノ中ニ五百歳余レク過トフ詭給ヲ  
 任云此讚ハ建長六二年ニ聖人ハ十二歳ノ御作ナルカ  
 和讃ニ帖ノ中ノ要文ニシテ一部ノ大意ヲ知ラレメ給ヘリ  
 トソ但シ憶念ノ心ト云ルハ仰ノ他カラテ云レサレトナリ誠ニ  
 文章博達ノ家ヲ出テ思ふルニ字ニ一字ヲ建給ニ  
 本ヨリ安心ノ法内ニシテ王位貴人モ自己ノ智能ヲ愧ヘク

張之本ノ西モ他カノ因分徳ヲ言ヒヤ仰ハハ總テノ思議  
 ノ子ヲ疑ハス深ク信シ高ク稱セヨトナリ

卒覺堂小町琴貝

色直庵

あふさあふさ〜 葉のたけ〜 葉のたけ〜  
 く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
 今〜今〜今〜今〜今〜今〜今〜今〜今〜今〜  
 今〜今〜今〜今〜今〜今〜今〜今〜今〜今〜  
 今〜今〜今〜今〜今〜今〜今〜今〜今〜今〜

任云此一篇ハ短筒十カラ上ノ箇ノ尊字ヲ用ヘテ箇ノ葉













ふれらるゝ人の用ひたるをいふ今も越梅のあはれ  
と連言のあはれをいふあはれはあはれこのあはれ  
とあはれとあはれとの用ありてあはれ人のあはれ  
とあはれとあはれとあはれとあはれとあはれの上  
一蓮花とのあはれとあはれとあはれとあはれとあはれ

任云此語ハ全ク解讀シテ先ハ我花ニ至リ題ニ至ラズ  
去レハ春ノ夜モ秋ノ曉トテト長短ノ情ヲ句ニ縮スル筆  
力・向在ラ移スシ次ニ天鵝絨ノ花ヨリ大名ノ隱者トハ  
名言ニシテ花ノ段ハ一篇ノ筆占ナリカレハ遠近ノ雨ノ  
詩ヨリ我朝ノ膝枕ニ至リ二二箇ノ故言又古言ヲ用ヒ

櫻ニ割リト云ル古人ノ文章ニモ過タラズ果シテ花カヨシ  
カノ詞ニ連言ノ儔ヲ含メスル言フ能談ノ筆致ニシテ  
一蓮花生ハ文ノ虚實ト知レ但シ作者ハ大野木也ニシテ  
別姓ハ佐藤ナルカ加納ノ城下ニ在ナラウ在字ニ隱故ノ志  
アリトワ

第三帝賛

鈍琢石川

世ノ神曲良の像と云ふはて聖賢者のあはれか  
れのかられ罪業をいふはあはれとあはれとあはれ  
文所樹々たるあはれはあはれとあはれとあはれとあはれ  
人とあはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれ

かの五皇上の圖と云ふは、我が家への侍りしや、えんを  
 換様のきりに、とくを、御もあつた、なつた、あつた、  
 又、御の業、入、あつた、と、誅、入、の、圖、と、云、は、る、に、龍、の、  
 入、方、の、ら、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、  
 も、半、入、は、れ、て、ま、ま、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、  
 お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
 う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、  
 こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、  
 こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、

い、帝、は、つ、り、の、聖、術、あ、つ、た、と、云、は、る、に、  
 一、く、聖、の、術、の、術、と、云、は、る、に、  
 ある、人、は、り、二、論、と、云、は、る、に、  
 と、云、は、る、に、  
 右、と、云、は、る、に、  
 の、や、と、云、は、る、に、  
 皇、帝、の、有、無、と、云、は、る、に、  
 一、く、陳、思、と、云、は、る、に、

任云此疑具ハ一體アリテ古文所謂論替ナリ此故ニ醫家

ノ掛物ニ封シテ暫クニ重ノ徳ヲ論テ似テ實ハ擾攘ノ新  
古ヲ云ヘリ然レハ皇天ノ會ニ有ル牛鹽ノ虚ニ通ナル  
例ニ虚實ノ法アリト銘スレシ况ヤ之箇ノ或人ニ古未盡擾  
ノ或人ヲ重キテ誠ニ文式ノ論字ヨリ曲折深遠ノ体ヲ  
尺セリ去レハ作者ハ山田中ナルカ別姓ハ鉦尾ニ濃ノ上有知  
ニ住スセ以テ醫術ヲ業トセリ陳思ハ其家ノ領子ナリ  
但シ上有知ハ順カ和名ニ云ル有知ノ里ノ上ノ邑ナリ

負讀

鳥居人

在リテ富ノりのらせのこはもおちりともいふよ

鳥のあ桜山にのろれて喰ひ中負子あきや  
此れやうの心細くしてあきよふらぬくまのしほ  
今とすそせもえあじんきまのきぬのてん懐か抑  
ふんとくやふあよとらふらわの如く招居のこころと  
はううーきうらにふぬこふとこまおん文親をたれ  
ぬの西言あきそれとねらあやうきいまるら今  
こころうのの記念とらして行くてあよとねと  
はらういてたの負子あきあうらりり中体心  
よ西とあき伊吹とらうてあ上川とああ格よ  
あうらと晴好雨春のあうあきあきあきねら





一と云ふことと云ふの感なり此等こそすまふ  
 の地あり意なきこといふまじきこと一と云ふの自持  
 一と云ふことと云ふの明了の人と云ふことと云ふの  
 危ねと云ふことと云ふの體相と云ふの感明  
 和尙と云ふことと云ふの文子と云ふことと云ふ  
 一と云ふことと云ふの依のる人なりと云ふこと  
 他と云ふことと云ふの凡顛漢と云ふことと云ふの  
 人とのことと云ふの漢の口と云ふことと云ふの  
 のおまをいふことと云ふの性慈と云ふことと云ふの  
 一と云ふことと云ふの疑一決の名をいふことと云ふの

佛家の法と云ふことと云ふの儒者の儒門の即ち云ふことと云ふの  
 性者の功と云ふことと云ふの負者一負者れ語と云ふこと  
 と云ふことと云ふの言を世にと云ふことと云ふの性  
 の負をいふことと云ふのいふことと云ふの性  
 おまをいふことと云ふの性慈と云ふことと云ふの  
 負福の論をいふことと云ふのいふことと云ふの

凡云け西語ハ字負ノニ子ヨリ前篇ハ我當下ノ詞ヲ終ニ  
 後編ハ支州ノ名ヨリ讚ス去レハ此讚ノ先端ニ重言ノ詞  
 ノ若輩ナルヨリ高ク儒仏ノ至論ヲヤル例ニ此語ノ筆格  
 ヨリ例ニ虚實ノ自在ヲ見レシ或ハ南寺ニ振頭ノ一對ハ

八用

一

西行ニ天毫ノ侍ト知ルヘシ或ハ滅明和尙トハれ子モけ人ノ親ヲ  
見テハ鉢坊ノ如ク思ハレシニ和尙ノ子ハ勿躰ヲ云ル是ハ其自ノ  
文法ニシテ他ノ及ハサル筆力ナリ宰我モ滅明モ家語ニ行ヒ  
アリ然レハ此公扁ニ抑揚ノ法アル結語ニ向ニテ人マシトハ  
口情ノ讚談ニ及ハサレ謂テラフモ此讚ノ眞實ヲ見テ先師  
七名ノ夏十六惟然ト同年ノ作也レ但レ惟然ハ夏懐ノ

敎柱自讚

垂其角

敎柱自讚  
びりきふてのは権を過きりて現在よつら

けままへりては曼卿よつらさうりてかゝる  
はういとまうあう

任云此一筆ハ懐ノ東雨亭ニ在リテ屏同ニ自筆ノ色辨  
然ラ四子ノ題各ヲ如テ例ニ選場ノ洵色トナセり去レハ  
定テ承卿ノ名ニ春ノ後ノ字ノ浮橋トスレテ筆ニ別レ横  
雲ノフヲトハ無心所着ノ所ニシテ此卿ノ風格ハ千吟万詠ニ  
此体ナルヲ吾子モ一生宝ヲスリテ故ニ彼カ伽讚ニ世ノ耳ニ  
居タルモ教多アリテ泉字辭世ノ句ニ至リテハ骨ノ曉近シ  
キリクストムルハ春ノ曉ニ秋ヲ思イ寄セタル 誠ニ今解終ノ哀ニ  
未末ノ未末トハ是ヲ云ヘレ但レ其角ハ武陵ニ遁放ス吾子ハ

後中記

讀徒志譚

江北房

世に傳れくそのくつるを園白良基公の御書  
その旨を伊予入るよりくちやされ書附の書令院  
のおよきくわて二万四千四百一十  
頃とわたり分ててはる連徒とくは傳記を  
の記こころわて傳師のさかゝる人たしはく  
はるに無我くころの抄名を抄名之意とて  
外名の傳をたし中よかくくころとて  
東華房ありて藤園白の御辨抄と傳記

の御記とわたりはれくの讀九卷とてはる首  
凡例大綱より別録の園公の書大曆の教とて  
或は三冊の艶書論とてはる或は三冊の  
の地とあつてはるたまの十五おし七冊  
の直ふくして余の二万四千余版も為辨  
とてはるしんを命をた抄名の折弓とて  
はるはるは讀ら大意とてはる大段とて  
してはるは二版とてはる子の名とてはる  
七章ありはるは序文のわのよりは路  
とてはるしんは畢竟は假假の二子不説  
はるは

本居宣長

十五



一部を新弁の法語とてつらわれりや、神座の法師の  
一語より諸所の人れすといふをうらなへ、剛の兼好のや  
情の抑揚、褒貶とらへて、さかた字面のやうに、  
やうりに文理不到のあつた馬人無我のうまよと  
自己のそだとつるあつた、  
ふらぬよ好色の段と借してをら洋ふのむじりめはら  
人々の意匠とていふをらつた、  
のふ法、  
ふらぬよ好色の段と借してをら洋ふのむじりめはら  
人々の意匠とていふをらつた、  
のふ法、  
ふらぬよ好色の段と借してをら洋ふのむじりめはら  
人々の意匠とていふをらつた、

は、  
て詞をびる北風、  
かきうりさうり、  
よ證ちねと證と命、  
ね云北證ハ徒然、  
實ニ其證ラ證スト云、  
比ノ接相ニシテ、  
故禪園ノ同書トヤ、  
アリまら後花園ノ、  
子善ク傳ヘスト、

本朝文藝

十六

ノ史書ナリトフ其世ニ故アリテ減板ナリト其詞ニ通好ノ  
古又跡ヲ載スルニ近慶ノ始ヨリ應守ノ末ニ總テハ  
四十年段ハナリトフ然レハ此護ノ趣ハ徒然護ノ年ヲ  
クテ其段ノ下ニ通明セサランニ

銘類

花桶銘

離立南

心ニシテ一ノ甲の心と云ふもこれ其心也  
の心も一也一といふ心も一也一といふ心も一也  
一ノ心も一也一といふ心も一也一といふ心も一也  
一ノ心も一也一といふ心も一也一といふ心も一也  
一ノ心も一也一といふ心も一也一といふ心も一也

花桶記ナリト或人ノ命傳ハタル其桶名ヲ  
言野山ト云ハシヤ然レ中前ニ有古名ヲ置テ前後ハ  
序詞ノ筆格アリシテ銘ノ一字ヲ題セリ但し此作有ハ  
中比ノ御土ニシテ離トハ此人ノ家名トフ

抑々銘

藤知行

あふぬをいかにのわのまらまら  
ふひれをそのほよらら  
ふふれをそのほよらら  
ふふれをそのほよらら  
ふふれをそのほよらら  
ふふれをそのほよらら  
ふふれをそのほよらら  
ふふれをそのほよらら  
ふふれをそのほよらら  
ふふれをそのほよらら



トナリ去ハ世向ノ議ニ或ハ南禪寺トモニ水平寺トモ大檀伽木ノ  
枕詞ナルヲ今ハ十椿ノ起語トナレハ前ニ此語ノ筆格ヲ得テ  
蕉門ニ此作者アリト云ハシ況ヤ其銘ノ洒落ナル漢ニ寒山  
詩風ヲ傳ヘテラニ語意ノ曉ラズルハ

著者銘 并序

西華坊

兼里ノ物ニシテ仰アリト仰ハテ是レ其ノ意ニ依テ也凡レ  
其ノ人ノ風流ニシテ山林ノ情ニシテ市井ノ角ニ於テ  
トシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ  
トシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ

西華坊

杜工部ノ詩ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ  
其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ  
其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ  
其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ  
其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ

其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ  
其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ  
其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ  
其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ  
其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ其ノ意ニシテ

ね云北銘ハ高陽カ陋室ニ效ヒテモハ句ニシテハ約ク但シ  
 著前ノ五文字ハフタト云キ花ナハ例ニ終語ノ云ク捨テ之  
 次ニ言師以下ノ句ハモモ四句ニシテ二句ノ意ナハ是モ高陽カ  
 山水ノ四句ヲ以テ二句ノ意ナルニ效ヘリ次ニ然ラハト返辭ヲ  
 置テ是ヲ約外ノ踏語トセシハ是モ高陽カ七字ノ結語  
 ニシテ總テハ長短ノ句法ヲ用ケル和漢ニ通用ノ文鑑ニ  
 一子ノ私ナキヲ以テ去シ去シハ其銘ノ二人トハ外面ハ著前ノ言  
 ニ言セテ<sup>カク</sup>須食<sup>カク</sup>應ニ呼ル縁語ナカラ西師ハ同時ノ名ニ呼ビテ  
 其内ノ言敬ラズルナラシテ増シテ松竹ノ對テト云クト遊ハレ  
 以流ナカラ名君ノ心ハ分明ニ是ヲ踏違ノ言可法ト銘ニ

誠ニ言師ノ指讓ヨリ師才ノ實訓ヲ感ズキヤ但シ裏里  
 ハ大鳴キニシテ痛ノ名數ノ垂ナリトナ

旅硯銘

相左角

い言よん此のれと説一ト心ハなれやあつり  
 るよん龍虎の勢と云一ト力ハ集けをいん

甘露

甘露  
 清一やのあは

ね云北銘モ但シ一体ナリ筆墨ノ二子ニ龍虎ノ容ニ  
 言セテ月花ノ一對ハ旅ノ以情ト見ルレ然ルニ序詞ノ

四句二韻ナラ後ノ銘語ニムクケタル是ヲモ首尾ノ韻  
ニシテ法格ハ千重ニ口能ナラシカ

古硯銘 并序

東花坊

い家ノ硯ありけの硯を大石内蔵のあはれに  
の人におぼれし一々の硯の硯よふり  
のち一の武印とて今此世の硯の  
と一の硯とて一の硯とて一の硯とて  
又あつちよも本儀の硯の地とて  
朝事とてさきとてなぬは硯の硯とて

麾下に十余人もあつち武の且角の硯とて  
とよく又武の硯とて一の硯とて一の硯とて  
一の硯とて一の硯とて一の硯とて一の硯とて  
硯の今此よふりもあつち硯の硯とて一の硯とて  
とよく硯の硯とて一の硯とて一の硯とて一の硯とて  
一の硯の浦の月よあつち一の硯とて一の硯とて  
あつち硯と西の硯と一の硯と一の硯と

硯とて一の硯と一の硯と一の硯と一の硯と  
一の硯と一の硯と一の硯と一の硯と一の硯と  
一の硯と一の硯と一の硯と一の硯と一の硯と  
一の硯と一の硯と一の硯と一の硯と一の硯と

中世の文章のよめぬのこゝれあひて次の海の家  
さうさうさう。あつと古知のあつとさうさう  
越後の海とわけて忠義の人れがさうさう  
あ。はとせらぬれはさうさうさうさうさう  
の舟さうさうさう。

任云此銘モ長短句法ナカラ五章ニテテ可ハ六中ニ一章  
ハ六句ニテ二韻ナリ是ヲ首尾ノ韻ノ定法ト云フニテ則ニハ  
著者銘ニ古法ヲ守リ又ニハ古歌銘ニ新格ヲ用イタル  
此等ニ文鑑ノ公論ヲ知ルレ但し此題ハ君子西カ銘ニ  
效ル彼カ銘バノ六句ニモむも六韻ノ論ハ有テテ例ニ

漢約ノ所法ハ東ナシ去六君舟臣水ハ貞觀政要ノ詞  
ヨリ總テ文武ノ兩用ヲ云ルニ花ノ木陰ハ忠度ノ事ヲ言ハ  
馬上ノ稱ホハ曹操ノ詩ヲ言セテ知候ノ文武ニ和漢ノ詩ヲ  
ヲ對セル誠ニ文筆ノ神ニテ博知ノ自在ニ致事ナシ然ルニ  
大石ヤ忠節ハ文苑武林ニ名ヲ稱シテ古今事功ノ武士ハ  
或ハ生前ノ文書ヲ尋子或ハ死後ノ調度ヲ求テ心アル人  
ハ秘蔵セリトフ但し播東ハ之國ニ住ル事生ハ播州ノ人ナリトフ

不血銘

信ノ事

いそらうり二月とふぬあふとのこころの地り

何れを十お八あんとお。

紀云地銘ハ短簡ニシテ韻ヲ用ルニ奇法アリ夫レ古人ノ論ヲ  
借ツテ今人ノ語ニ取合セテハ毛モ一筆ニ向テハ似テ二句  
ニ韻ナルヲ見止レ况ヤ月花ニ昼夜ヲ對セル有述ニ自在  
ノ人ナルヲヤ多ニ合テ夜ハトハ世ニ不與ノ語ニ已レ八十方ニ酒ヲ  
盛ルク夜ハ八方ニト云ハナリ但レ世余ノ銘類モ條朝ニ  
管ニ以テ紀納言ト種々ノ體格ヲ見合ヌレ

本邦の文鑑才九

日記類

芭蕉云羽終年記

庚午紀行

自造終年記

碑文類

雙林寺假名碑銘

圖司言誌

弔文類

生身龜家宗文

弔許言文



日記類

芭蕉翁終身記

吾其角

此もくけぬさとの男合衆ありしとてその佐也  
 凡雅とさちや二子余人の行をみるて素洛とて合信  
 きたる国と孫のゆゑとあるいふもも勤けふに居た  
 天和の比あしつ武内の子なる急忠の難しか潮れ潮  
 事とありて煙の津入りのいふしそそぶの社のとてあふ  
 こゝめあるやまゝと猶如た老のままとはさるる雁所住  
 んとてあるいふとて次のこゝを甲斐のふりまゝとてかく  
 官士の書のはれをみるに東月下入雁所住

ことすこゝれ跡とあつていかにせん人への後くて終る  
 のるまゝとてなるといふこととていふははるる一様の  
 芭蕉とて世とてさゝめるといふおとつてあつた  
 時のふれれ人といふこととて芭蕉のふれれとていふ  
 国とてさとの大嶺和向とて男とていふこととていふ  
 あつたけさぬのち卦とていふ事とていふ卦とていふ  
 是らといふはるのふれれとていふとていふとていふ  
 のこゝれとていふとていふとていふとていふとていふ  
 事とていふとていふとていふとていふとていふとていふ  
 こととていふとていふとていふとていふとていふとていふ







あまや 携路の麻田家の蔵に於て湖上の月を映て  
 いふふの月をまゝしあれは遺骨も水くけ地は流ん  
 らういふはういふるうにそあとも遠く風のきこり  
 海舟とまゝいんいんまゝい記とりて地元の使し  
 犯云は記貞祐尾花よま集在り今ノ文下増減所  
 ありまゝ獅子庵遺稿ヲ見ルニ元禄乙亥ノ春カ武に  
 我師ト對論アリテ其後ハ書通ニ増減セシヤ増減ノ書  
 ニ世更アリをモ花實ノ評論ト見たり  
 云レハ天和ノ急火ヨリ故弱ノ生涯ヲ尽セルニ本ヨリ  
 大難ノ易ニ泥ニス況ヤ仙頂ノ禪ニ携カクナル風雅ノ幽寂

身ニ行ヒ俳諧ノ洒落ヲ喜ビニキメル其師ノ本懐ヲ尽ス  
 ト云更ナク其師ノ遺筆ヲ傳ヘスト云更ナシ誠ニ世道ニ  
 其ツ羽アリテ且ツ云羽ニけ弟子アルヤ或ハ能因ニ其ト  
 イヤト幻ニ誘ヒヌラニ終末ノ文ノ奇絶ニシテ眠ルヲ朗外  
 息々又ハ終末ノ詞ノ文鑑ト云レシ増シテ舟ノ夜ノ哀ナル  
 落月ノ霜モ其夜ノ明ハカナラシカ然ルヲ世記ノ末云ラハ  
 湖上ノ風景ヲ朝之則ニ寄セテ寂室和尚ノ風流ヨリ骨モ  
 清カラント結語セル筆陣ニ風雅ノ暇アリテ古来ノ後集  
 ニニ記セサル所ナランハ又ニ弟子カ筆カラテ知リテ我門ニ  
 け作者アリト感スヘシ但し世記ハ元禄甲戌ノ冬ナリ



あの人かほきよきまはらひのまはらひある人もさるの轡の料  
 とほいてこの月の糧とありさるゝ一女のしらべと  
 わねと我を綿ワタおあつゝあつゝの糧よさるゝ一女のあ  
 かりふくよかりふくはらひしてさるのまはらひとさるゝ  
 あるとお船の指さるゝおまはらひとさるゝ一女のあつゝ  
 指さるゝありてお船と親しむおまはらひとさるゝ一女のあ  
 の道途とさるゝおまはらひとさるゝ一女のあつゝとさるゝ  
 道記とさるゝお船と貫之長崎とさるゝ一女のあつゝとさるゝ  
 おまはらひとさるゝ一女のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ  
 ておまの轡指とさるゝおまはらひとさるゝ一女のあつゝとさるゝ

短刀のるよふるをさるゝとさるゝおまはらひとさるゝ一女の  
 膝たれとさるゝお船ありかゝるゝ一女のあつゝとさるゝ一女の  
 おまはらひとさるゝ一女のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ  
 おまはらひとさるゝ一女のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ  
 おまはらひとさるゝ一女のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ  
 とさるゝお船のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ一女の  
 おまはらひとさるゝ一女のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ  
 の轡言とさるゝ一女のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ  
 のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ  
 一女のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ  
 一女のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ一女のあつゝとさるゝ







Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise, written in a cursive style. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines within a rectangular border.

Small marginal notes or a page number written vertically on the left side of the page.

Handwritten text in Arabic script, continuing the text from the previous page. It is written in a cursive style and occupies most of the page area.

Small marginal notes or a page number written vertically on the left side of the page.

木部文鑑九

十一

平本記の事

紀行の事

紀行記ハ元禄ノ庚午ナラシカ四ニ傳ルモ多クシ身ハ紀行  
トモ云ル其紀ハ貞子ノ秋ナルレ去ルヲ武以ノ芭蕉ニ庵ニテ  
紀行ヲ取捨シ玉ル元禄ノ辛未ト見タレハ兩紀ノ文法ヲ取  
合セテ此ニ編ラ成セリト見ユモ故高ノ旨捨シ又文章ノ多  
ク幻住ノ庵ノ脚ト記上ニ通ノ遠クアル如ク度モ取捨シ  
玉ルラ人ハ秘蔵シテ傳ル故ナリ見ルハ尤モ点換  
去レハ紀行ノ婉麗ナル是ラ詩才ノ人モ秘シ是ラ連儷ノ人モ

子ハ云ルハ芳野ノ花ニ至リテ一唱一和ノ作ヲウケス画ニ画ノ二ニ  
筆ヲ絶タル是ラ又文章ノ屈曲ニシテ是ラ又文章ノ起結ト  
云ハスヤ尤モ殊師ノ碑文ニモ此等ノ趣アリ云ルナリ或名所  
ニ雜ノ句ノ古又ハ蕉山ノ余同ニ證句アリテ端牛ノ句ハ雜体  
云ル或ハ猿面ノ類ナラシ傳但レ世記ニ用ル所ノ故夏古語  
ナト數多ク中ニ芳野ニ接シ章ノニ字ハ誰ニカラン知ラズ  
或ハ筆ト各タルモアリ尤モ詩才ノ作者ナラシカハ世記  
ノ結又ハ端牛ノ句ニ合捨テ其終リヲ調ハルモ先ハ紀行  
ノ様樣ナカラズヤ子ト垂解ノ事イラ寄セシ海軍六十帖  
采路ヨリ人向一世ノ夢幻ヲ觀シタル例ニハ編ノ旨同ノ節ニ

本明文盤



一、このおちかれとみちかきさるは、  
 比叡の御神とて、  
 御の神とて、  
 の三祀、  
 九をひかひ、  
 魯と孔丘と、  
 危の、  
 やふ、  
 孫、  
 ころとや、

一、このおちかれとみちかきさるは、  
 比叡の御神とて、  
 御の神とて、  
 の三祀、  
 九をひかひ、  
 魯と孔丘と、  
 危の、  
 やふ、  
 孫、  
 ころとや、

ありてはしきも、いかに、其の、思ひの、向ふ、こと、いふ、こと、  
 こと、年、の、實、の、康、富、こと、一、驚、た、の、向、つ、ら、ふ、こと、  
 され、と、先、なる、仇、謀、の、望、と、ま、う、て、け、り、か、し、わ、す、の、情、と、  
 わ、い、ふ、あ、い、る、世、の、先、と、三、口、す、は、い、い、て、決、し、仇、謀、の、  
 人、の、説、う、ら、に、御、を、一、た、い、二、口、御、を、い、い、て、仇、謀、の、情、の、  
 二、論、より、新、古、の、差、別、と、あ、い、う、ら、御、を、持、あ、つ、て、持、し、  
 論、あ、い、う、ら、い、い、て、論、を、自、他、の、好、悪、と、あ、い、い、て、は、い、  
 世、の、事、通、し、い、い、と、い、い、よ、れ、の、比、の、早、も、あ、い、い、て、  
 事、し、ゆ、よ、の、あ、い、う、ら、い、う、ら、い、う、ら、い、う、ら、い、う、ら、い、  
 か、ら、の、御、を、い、い、て、御、を、い、い、て、御、を、い、い、て、御、を、い、い、て、

才、よ、と、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、物、よ、い、え、な、の、序、の、  
 古、今、よ、る、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、  
 二月、十二、日、の、洛、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、  
 事、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、  
 あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、  
 一、論、と、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、  
 漢、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、  
 こと、い、い、て、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、  
 西、華、也、も、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、  
 一、論、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、あ、い、う、ら、い、の、

多しあつてはさしあつて非ともよふらん風情もあつて風情もあつて  
うま秋のうたねのそとやあつてんせ秋の上のよのそとやあつてんせ  
のれのおれくんとそとの月をけし世のふくとあつてんせ

和漢記の在固カ齊物ヲ題シテ題名ハ但しの篇中ノ詞ナリ  
去ル起スニ客名ノ二字ヨリ客アリテ名ナキ物トハ是ヲ終正ナ  
去言トシテ着ルハ客ヌラ即破スヘシ去ルハ篇ノ故言又古語ニハ  
例ニ和漢ノ自在ナカラサ意嵐ノ對テ新詩ナラヨリ花鳥ニ  
雲水ノ對ハ誠ニ世々篇ノ骨ノ節ニシテ我師ノ本情ハ此二句  
ニ見徹スヘシ或ハ水ノ蛙トハ在中將ノ詩アリテ立向ノ古ナリ  
ヲ西行ノ詩ト取合セタル是モ又南ノ法トヤムン増シテヤ馬ニ

佳句ノ古詩ヲウケ任信ニ和詩ノ名同ラウケタレ全ク又南ノ  
文法ト知ルヘシ或ハ昔ノ詩ノ句評トハ我師ニ及発悟ノ故アリテ  
湖南ニ曲翠亭ノ夜話ナル先ニ陳情表ニ世古ヌアリ或ハ  
世方野山ノ句トハ陳書紀行ノ世方野都ニハ一ノ書ヨリモ軍書  
ニ悲シ世方野山ト云ハ我師ノ雜ノ句ニ隱士初事ト難陳ノ詞  
テ故云羽ニ世方野ノ及先句ナキ故ヲ明セリ或ハ風姿ノ風情ノ論先  
ニ八廿書ノ松系ヲ撰シテ後ニ續五論ノ拾遺ニアリ總テ離諾ノ  
理論ナリ或ハ今ノ二ノ一經トハ我師ノ五條ヲ註シテ一ノ二六句  
ノ姿情ヲ附方ケテ二ノ一巻ヲ一ノ詩仙ニ附合セタル八位ノ變化ヲ  
云ヘナリ但し獅子庵ノ遺稿ニ在リテ書肆ニ出サス然レハ一ノ篇

結文三語は皆空人所ヨリ眼ニ秋ノ色ヲトメ耳ニハ秋ノ音ヲ  
残セル是ヲ佛教ノ生感自在ト云クテ是ヲ文通ク死活自在ト  
云レ但シ結語ハ人丸ノ事ナカラ舞世ノ詞ヲ借ルナレ

碑文類

芭蕉公羽石碑銘

并序

東華坊

我師ハ伊賀の國ニケレテ兼應の比ノ藤堂の末  
ニシヨレメ之ヲ枕比の書ニトテ今の中ニ松尾  
ありリ年々ハク平の老トナリテ武傍の澤川ニ  
世トのれて世ノ芭蕉公庵の邊ニ人ノのりて  
きりるる人ニシテ其ノ徳ハ今ハの事ニト

枕語をあげていし師の徳とわびと云ふは  
ねがひのりていふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
こそ富士ノ節のふよふよふいふいふいふいふいふいふいふ  
こいちとけいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
此ノ世の枯られて難波の浦ニ世ト人ト云々いふいふいふ  
非サ月ノ年の二ハありりらりと湖ノ水ニ  
其の意ト云々いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
のふらねいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
んとけいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ







くあられりゆのふとあはるるもつらねのほろひとありて  
あしつゝ言とあるはむとくつとやしてその言はあつむ  
けりて阿るふくさしてけりて高ぶのまの事とけりて  
よとくく言ふとむして皇詩の情とけりて

當飯よりあつたけのまをれりて 皇孫庵

厚一ぬらふとけりてこれむのつ 西宮堂

死うきてけりてはむとけりて 野盤子

和の皇詩の文選も論より夜生年月ノレテ詩レテ銘文

ノ類ハ雷アリトクエト今ハ任勝カ皇詩ニ致ルヤ序詞

ノ外ニ詩文ヲ出セリむも後節見キナリ去レハ詩文ノこと

當飯ハ孟暹カ詩ヲ言シ花陰ハ西行ノ言ヲ攝ミテ西宮堂  
カ鳥ハ頓挫ノ格トムレ何モナ字ノ口授アリテ故云羽ノ及文字ニ  
世論アリ但し圖司ハ其姓シテ各ハ君ヲカスル出羽國ノ御侍

帛文類

生身魂帛文

北七里

いゝと難波のまこととててせのほろひとありて  
今とそとの浦の江朝とていひて二んめ美走とてい  
あつてそれとせの人とあつていひていひていひて  
唐名とていひて名とていひていひていひていひて  
るの傳名尾張といひていひていひていひていひて



いもむの編ハ電難ナレ似々下多三子之困窮ヲ忘レ刺詰ニ  
寄日テハ生見魂ノ意ヲ結ヒ難ク幸無クハサニ祭文ノ趣ヲ  
顕ハ誠ニ七縦八横ノ体ナリ但止段ハ我師ノ名ヲ即破

弔許六文

渡部新

江守の許六は凡雅の大剛の男一十の弟海は純譜の  
謙とひび也一詞林よみ善平の安行とよとけんそ  
天下の純士と云ゆも一純譜擅上り其の印とて  
殿心石肝の大將ト一あ一はくと世人の病り  
公勢よきく一りりり十とをまがりのこや一の秋月一前

於一カヤ一り一ヤ一れ一純一譜一江守の四折とありて  
り一七一ト一文一施一も一也一し一と武隆の臣置一庵一  
あ一り一て一葉一内一の別一のた一む一む一純一譜一と一  
ま一も一狩一のる一ひ一や一あ一ひ一や一も一と一と一あ一の一作一  
あ一り一と一り一り一や一益一と一と一と一書一と一と一と一と一  
武一花一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一  
手一聖一觀一の一本一由一と一な一と一と一返一村一未一る一と一と一聖一  
あ一り一編一の一純一書一と一あ一り一と一と一と一武一海一と一其一角一  
洛一陽一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一  
あ一り一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一

師師とむ坊とむり二方々のなうて師師の作意  
の流りあしんま作とたぐひのるたといひ其人は  
作との可くあれつととなるの直きありとあつた  
きしつゝ其師の昂心師師とらとれと馬祖の非心  
非師とあつたつとく師師とたの人のこのむ所と  
破つたの何とを言語の作不作とあつたつと海や  
五老井の師書とらくら又自果とえつた天下の人此  
え論とやしん一終よのくよとたんとと師師と  
たの中此一人とあつたつとあつたつと面々の世情と  
とあれてそと二方々のなうてつとやたれつと師師の

まふに選選文選のまふ論ありて筆陣の強又まふと  
るつとてつと師師とたの秋のまふのなうたつと  
世秋のまふのなうたつとつと師師の論と一世の師師は  
ぬわつと又三章のなうたつと百作の面々のなうたつと  
師師の敵とらつとや師師とつと其人とつと師師  
やそと師文の趣意とつとそと選場の結つと

狂云世等師師一師ノ結文トハ先師カワテ選文選ヲ思イ立テ  
終ニ其古又ノ成ラステハ又ニ文鑑ヲ選スル時ハ物ニ其人の名ニ  
觸レキヲ今ヤ世選ノ半端ニ到リテ其古人ヲ失ハル古又ノ情ヲモ  
尚惜ムキ故ニヲ然レハ一篇ノ趣ハ始ニ韓信カ將權ノ勇



倭名と云ふものの配と奇人連名の用と云ふれ軍を  
 付記の後ありきと神代文の體と云ふ一は  
 此等の詩と云ふらば其の辭とありて詩と  
 文類の如くも一は其の和漢より其の辭とありて  
 其の章の人代はも一は其の辭と人偏のその章とら  
 して其の章とありて其の章とありて其の章の人代  
 其の章とありて其の章とありて其の章の意と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と

奉は其の章とありて其の章とありて其の章の體と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と  
 其の章とありて其の章とありて其の章の體と



本館  
三十一

この書は人々に假名文を教へしむるの書なり  
京師の書林に在りしは其の著しむるに  
と云ふ事ありし也

享保戊戌夏六月上浣

江戸日本橋南二丁目

小川彦九郎

京寺町押小路橘屋

野田治兵衛

# 書目林

